

## 藤村と芭蕉

### Shimazaki Tōson and Matsuo Bashō

宇野 憲 治

Kenji Uno

Shimazaki Tōson (1872—1943) had a keen interest in Matsuo Bashō (1644—1694) consistently throughout his professional life since his youth when he started to envision a career in literature. His interest in Bashō has shifted in terms of the various stages of his life. The changes of his interest and his interpretations of Bashō's works are deeply related to the changes which occurred to Tōson himself.

This is an attempt to show how Tōson's interpretations of Bashō's works have changed by examining Tōson's writings in terms of the four different stages of his life.

芭蕉に関する藤村の文章<sup>(注1)</sup>であるが、管見に入ったものだけでも多数ある。また、直接芭蕉について記してはいないが、「旅」ということに関連して芭蕉の影響が見てとれるものも数多くある。

また、藤村がいかに芭蕉及び俳諧に興味をもっていたかを見るのには、藤村の蔵書目録<sup>(注2)</sup>を調べてみるとよく分かる。しかし、現在残っているものは、フランスからの帰国後関東大震災以後のものであり、それ以前のものは、著作なり藤村の文章なりから類推する外はない。例えば、「文学に志した頃」(『飯倉だより』所収 大11・9・5)等を見ると、

私は少年時代から芭蕉が好きであつた。あの湖十と言う人の編集した芭蕉の古い全集などを古本で求めて来たのも随分古いことだ。その当時の自分は同郷の先輩の家に身を寄せていたほどの境遇ではあつたが、その乏しさの中から随分苦心して古い俳書などを集めて読んだ。その頃に『五元集』とか、『風俗文選』とか、『俳諧十論』とかを読んだ見た私の目的は、いろいろな弟子達を通して芭蕉を知りたいと願つていたからであつて、芭蕉に関したものはどんな人の書いたものでも目を通すのを楽しみに思つた。あの『奥の細道』や『笈の小文』や

『幻住庵の記』などは少年の昔から何程愛読したか知れない。私は又、芭蕉が好きだという丈のことには満足しないで、芭蕉の求めたものを求めようと志して行つた。そんな風にして次第に西行の『山家集』や『選集抄』を読むようになり、李白や杜甫の詩集などをも愛読するようになった。

とある。芭蕉の著作のみならず、芭蕉の弟子達の著作、また、芭蕉の求めようとした西行・李白等にも広く関心を持ち、その著作を精力的に読破して行つたことがわかる。

また、藤村の晩年の蔵書目録をみただけでも、藤村が晩年まで、いかに芭蕉にまた俳諧に興味と関心を持っていたかがわかる。そしてそこには、単なる芭蕉理解ではなく、芭蕉の生き方に深く自己を沈潜させ、自己を重ねて行こうという藤村の生きる姿勢が見てとれるのではないかと思う。

藤村の芭蕉との関わりについて、大胆ではあるが、四期に区分して考えてみた。

第一期としては、雑誌『文学界』に関わつたその前後の時期と言つてよいかと思う。即ち、仙台赴任前の藤村と芭蕉の関わりである。

第二期としては、仙台赴任以後から渡仏前までの時期である。

第三期としては、渡仏中及び帰国してからの一時期、即ち、『処女地』発行以前の時期である。

第四期としては、『処女地』編集・発行における加藤静子との出会い以後の時期である。

以上の四時期を想定した上で、藤村と芭蕉との関わりを見ることにより、藤村の芭蕉受容と藤村の人生ということについて考えてみたい。

## 一

まず、第一期から見て行くことにする。

藤村の関西漂泊の時期前後には、たくさんの芭蕉に触れた文章がある。まず、「故人」という文章について考えて行く。この「故人」は、北村透谷の「松島に於て芭蕉翁を読む」(『女学雑誌』明25・4・23)という文章に刺激されて書かれたものであるが、透谷は「松島に於いて芭蕉翁を読む」の最後のところで、「夢なのか現実なのかわからない状態で破笠弊衣の老翁を見た」とある。しかし、藤村の場合、芭蕉の現れ方は、透谷と大いに異っている。

うつつの夢をたよりとして故人を尋ねんとするはおろかなる業なれど、これも風雅の迷いなるべしと七日の朝よりは残る隈なく諸方の山々を馳せ廻る心なりしが、この日あやにく客あつて閑談に時をうつつし、一人を送りて一人を迎へいつかひぐらしの音の高きに驚きて今日の夕暮れまでに故人に遇はんと夢みしは迷いの上の迷いなりしか……

(「故人」明25・8・22「女学生」)

と思ひながらも富士川の辺にやってくる。「再び行かんとすれば後の方にて異なるる声を聞きぬ。あやしきことに覚えてこなたの松の樹影を見れば、つゞれに包みたる捨子なりけり。」(「故人」とある。芭蕉はこの地で、「猿を聞人捨子に秋の風いかに 桃青」という句を読み、つづけて「いかにぞや、汝父にくまれたるか、母にうとまれたるか。父はなんちを悪ムにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯是天にして、汝が性のつたなきをなけ。」(芭蕉「野ざらし紀行」と記し、捨子を拾うこともなくその場を立ち去

っている。しかし、ここで藤村は「予は故人を尋ね得たりと捨子を抱きて名月をのぞむ」とあり、「捨子」を通して「故人」芭蕉をしっかりと懐に抱きとるポーズをしているのである。実際に「捨子」がいたかどうかは疑問であるが、このようなポーズを取ることに、現実目に見える形で芭蕉を理解しようとしているのである。透谷の夢幻的芭蕉理解と較べると、この頃の藤村の芭蕉理解は、現実的実感的芭蕉理解といつてもよからう。関西漂泊前後の藤村には、やはりこの傾向があつて、例えば「藤の花」についてもそのことが言える。

芭蕉は旅に疲れてやっと宿に到着した折、「くたぶれて宿かる頃や藤の花」という句を詠んでいるが、藤村は

ここにまた故人を見たり藤のかげ

ほのぐらき行燈の影に茶を飲み袋を解き、ひとり故人をしのぶの心得たらんものは百里の途をたどりて始て一友と相見たるのよろこびを語るべし。  
(「かたつむり」明26・3・30『文学界』)

と記し、「藤の花」を通して芭蕉の姿をはっきりと見ているのである。また、「芭蕉風月庵の二碑を廃寺にさぐり、須磨寺に詣でて平家一門の名残をかなしむ」とあるように、「芭蕉風月庵」「須磨寺」に佇むことによつて外的現実とそれによる実感を通して芭蕉の姿を把握し、理解しようとしているのである。

「刀鍛冶、堀井来助」(明26・6・30『文学界』)という文章があるが、これも藤村の関西漂泊の折に書かれたものである。「ことし鳩の湖のほとりに詩をたづねてはからず老人を鳥居川村に見たり。」とある。その老人が「刀鍛冶、堀井来助」であるが、その老人の姿は「短髪秋霜の如く老骨

藤村と芭蕉

剣に似たり、今ここに自ら古人のおぼろ佛かげに立つの心地せられて……」と芭蕉の姿と重ねられ、「古人のおぼろ佛かげに立つの心地」と眼前に芭蕉がいるかの如く髣髴としているのである。

すでに見て来たように、この時期の藤村の芭蕉理解は、「捨子」「藤の花」「芭蕉風月庵」「刀鍛冶、堀井来助」等、眼前の物や人を通して芭蕉を現実的に見ようとしているのである。

また、この関西漂泊の旅は、頭をまるめ墨染の衣を着、芭蕉の姿を真似ながら、東京から近畿の須磨・明石・吉野・琵琶湖周辺等とさすらい旅であったが、この旅はとりも直さず、芭蕉の「野ざらし紀行」「笈の小文」の旅と重なっている。いわば芭蕉の外形的受容の旅といつてよいであろう。後年著わされた「春」の一節(第四十二章)に次のようにある。

其夕方、青木は近所へ話しに行つて居た。細君が駆けて来て、「西行さんが見えましたから、早く御帰りなさい、」と言ひ置いて帰つた時は、全く青木も不思議に思つた。まさか岸本が坊主になつて、其様な近いところまで彷徨つて来て、加に土左衛門になり損ねたなどとは思ひもよらないから、誰が訪ねて来たのか、斯う思いながら、急いで寺へ帰つた。彼は先づ友達の変わりはてた姿に驚かされた。

「うん、君かア。」思はず青木は口走つた。

「西行さんが来たなんて言うから、誰かと思つた」漂泊の思想は絶えず青木の胸の底にも在つた。それを青木は、口癖のように、「西行的、西行的」と細君に言聞かせて居た。で、飛んだところで、操が其の「西行さん」を利かせたのである。

という箇所であるが、ここで青木は北村透谷であり、岸本は藤村をモデル

とされていると考えてよい。何事につけても「西行」と結びつけるのが透谷であり、「旅」と「芭蕉」を結びつけているのが藤村である。「春」の中で、操（透谷の妻がモデル）が、岸本のことを「西行さん」と呼んではいるが、藤村にとってみれば芭蕉の姿を真似たつもりなのである。

このように外形的類似性を求める、つまり芭蕉のたどったコースを追体験して行く、芭蕉の見たものを通して芭蕉の面影を髣髴とさせる……といったようなのが第一期の藤村の芭蕉受容であり、また芭蕉理解の特色と云ってよいのではなからうか。

二

次に、第二期にあたる仙台赴任以後、渡仏前後の藤村についてみて行こうと思う。第一期・第二期と区分すること自体奇妙であるとは思うが、便宜的に整理しておくこと把握しやすい面もあるので、敢えてこの区分を立てて以後見ていくことにする。

藤村の芭蕉受容が端的に表れているのは、『若菜集』『落梅集』等の詩編、特に「草枕」・「小諸なる古城のほとり」・「千曲川旅情のうた」・「椰子の実」等である。

夕波くらく啼く千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽をうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

（「草枕」）

小諸なる古城のほとり  
雲白く遊子悲しむ

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

千曲川柳霞みて

春浅く水流れたり

たゞひとり岩をめぐりて

この岸に愁いを繋ぐ

（「千曲川旅情のうた」）

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて

汝はそも波に幾月

舊の樹は生いや茂れる

枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕  
孤身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば  
新たなり流離の憂い

海の日の沈むを見れば  
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の潮々  
いづれの日にか國に帰らん

(「椰子の實」)

また「文学に志した頃」(大正11・9・5)には、

私は又、芭蕉が好きだといふ丈のことには満足しないで、芭蕉の求めたものを求めようと志して行つた。そんな風にして次第に西行の『山家集』や『選集抄』を読むやうになり、李白や杜甫の詩集などをも愛読するやうな青年になつた。これから受けた感化は何時の間にか青年の私を老人くさいものとした。なかなかそんな若い年頃に、古人の書いたものが十分味へる筈もなかつたが、でもあの芭蕉などの心の深いところに引きつけられて、どうかしてあゝいふ詩の世界の奥を知りたいと努めた結果、何時の間にか私は自分の年頃も忘れ、青年として育て、行かねば成らない自分自身の芽のあることも忘れ、この人生を行

藤村と芭蕉

きつくしたやうな円熟の境地にある古人の足跡をひたすら追いかけるといふ風になつて居た。そこへ私が気の附くやうになつたのは二十五歳の時に仙台の方へ旅した頃からであつたと思ふ。

仙台へは私は寂しい旅をした。然しあの仙台の一年はいろいろな意味で私には忘れることの出来ない時代であつた。日頃思慕する古人なぞが自分等と同じ年頃には何を思い何を書いて居るやうな青年であつたらうか、そこへ気づくやうになつたのもあの時代だ。

とある。それ以前は聖人芭蕉のイメージがぬぐいきれておらず、ひたすらその面影を慕い憧れて行くといった、外的芭蕉受容であつた。しかし、この時期に到つて、芭蕉が等身大となり客観化されてくるのである。そして、芭蕉の内心への思いに到るのである。「芭蕉の尋ねたもの」・「芭蕉の求めたもの」を求めようとするのである。人生を歩き尽くしたやうな境地にある古人の足跡をひたすら尋ねようとして「旅」に出るのは、仙台赴任前までの藤村であつた。しかし、仙台赴任以後の藤村、即ち『若菜集』、『落梅集』等の頃に見られる藤村の「旅」に対する思いには、単なる現実的な古人の足跡を尋ねるやうな「旅」ではなく、一般化された「旅」となるのである。古人を慕う「旅」から離れ、現実の人生から脱離するための「旅」という意味・様相を強く帯びてくるのである。

漂泊の生涯を慕ふ心が復た胸を衝いて湧き上がる。住宅も、画室も、妻も、子も、なにもかも打捨て、了つて、三脚と画具を抱いて、浮浪する旅人の群に交りたいといふ氣になつた。到るところの緑陰は自分の画室では無いか。到るところの花草は自分の衾では無いか。到るところの青空は自分の天井では無いか。

斯う考へて、伝吉は石の上に腰をかけた。腰をかけ乍ら思ひ沈んだ。

〔水彩画家〕明37・1・1『新小説』

また、

「俺の家は旅舎だ——お前は旅舎の内儀さんだ。」

「では、貴方は何ですか。」

「俺か。俺はお前に食物をこしらへて貰つたり、着物を洗濯して貰

つたりする旅の客サ。」

「そんなことを言はれると心細い。」

「しかし、斯うして三度々々御飯を頂いているかと思ふと、有難い

やうな気もするネ。」

斯んな言葉を夫婦は交換した。

ヒヨイヒヨイヒヨイと夕方から鳴出す蛙の声は余計に旅情をそゝるや

うに聞える。それを聞くと、三吉は堪へ難いやうな目付をして、家の

中を歩き廻つた。

〔「家」(上)第五章 明44・11・3〕

とあるように、このころの藤村の文章に直接芭蕉がでてくるのは少ないのである。また、直接芭蕉に触れたエッセイ等もほとんど見られないのである。

このような意味からすると、第二期における藤村の芭蕉受容は、直接芭蕉を追うものではなく、芭蕉の心を思い、「旅」そのものの、人生における意味を考えるようになってきているのである。第一期に較べると外形的に芭蕉を把えるのではなく、「芭蕉そのものの内面」へと藤村の心は向いているのである。

### 三

第三期について見て行く。第三期にあたると思われるのは、藤村のフランス滞在中から、帰国後の加藤静子とめぐり会う前、即ち「処女地」発刊以前の頃までである。

この時期は、第二期の寡黙さを破るかのようになり、芭蕉について多く語りはじめた。今までの沈黙がうそであるかのように、芭蕉に関しての文章が一挙に増えてくる。

これらの文章から読み取ることの出来る藤村にとつての芭蕉とは、どのような芭蕉かという点、同伴者の様相が強くなってくる。そして、藤村自身の生きる姿勢と重なっている。しかし、今までのような「旅」する動的芭蕉ではなくて、孤独にひとり坐す静的芭蕉に目が向いている。

旅の鞆の中に『芭蕉全集』を入れて参りました。斯うした客舎で『奥の細道』なぞを読んで見ることは、それが自分に不思議な力と暗示とを与えて呉れるばかりでなく、又国の言葉の有難味を味ふといふばかりでなく、自分等の国の方のこと、当地にあるものと比較して見る便宜にも成るのです。私は自分で自分に問ひました。芭蕉の書いたものには無常迅速といふことがある。幻住といふことがある。それから起る哀み、敬虔な気分なぞがあらはれて居る。一体東洋の方で自分等の無常観をそゝるやうな外界の現象が矢張り、にも有るだらうかと。

また、

「月はあれど留守のようなり須磨の夏」という芭蕉の句なぞを口ずさんで、

ともある。須磨・明石といえは源氏物語、それも失意の光源氏の流刑の地である。その源氏物語の中で、光源氏がこの地を訪れる季節は秋であるが、芭蕉は夏の須磨を訪れることによって、人生に対する空虚さのようなものをこの句に託している。その芭蕉の心の空虚を読みとるかのようによい、

旅を栖家とするものの苦しみと、あの句に込める深い空虚とを味わった。

と記している。「新生事件」を起こした藤村にあって、日本から逃れ、異国フランスでの孤独な藤村の心境と、孤高であるが故の孤独を実感している芭蕉の心が奇妙に一つに重なっているのである。

今までは旅に憧れ、旅を友とし、「人生は旅」だとするような一般的であつたものが、フランス体験を経ることにより、芭蕉内面の孤独と藤村自身の孤独が計らずも一致してゆくのである。そしてそれは、藤村自身の生き方において、心的に芭蕉と一体化してくる。芭蕉を見ることが自己を見ることがあり、自己を顕証することである。そして静かに芭蕉を思うことによつて自分自身を思うことになるのである。自己の内面に深く沈潜して行く芭蕉理解となり、単なる「人生は旅」だとする諦観的考え方よりも一歩踏み出し、藤村の内面へと深く芭蕉が定着してくるのである。

私達が自分の国にある昔の詩人のことを考へて見る場合にも、今でもあの芭蕉などに動かされるといふのは何のためでありませう。仮令時代を異にし、思想を異にする元禄と大正との隔りがありましても、あの動揺に静座した芭蕉の生涯は長く人の心を動かさずには置きましままい。今晚私の申上げようと思ふことは、おほよそ是で尽きました。

〔市民講座〕講演中第五篇「朝日講演集第五輯」

大正九年九月一日大阪朝日新聞社刊

「旅」をする芭蕉の内面を貫く、「動揺に静座した芭蕉の生涯」が、藤村にとつて重要であり意味をもっているのである。また、別のところで、

芭蕉の生涯は旅人の生涯であつたばかりでなく、漂泊者の生涯であつた。「漂泊の思ひやまず、」と道の記の中に書いてあつたと思ふ。芭蕉に行かうとするものは、あの言葉の光を捉へることを忘れてはなるまい。

やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲

この句は漂泊者の精神の光景を指摘して見せたやうで、何となく胸に迫る。

芭蕉は精神上の旅人でもあつた。西行へも旅し、定家へも旅し、万葉の諸歌人へも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した。漂泊に徹したこの詩人は、一步は一步より動揺の上に静座する精神的の生活を創造して行つたように見える。

芭蕉は日常生活の細目に精通した詩人であつた。

海士の家は小海老にまじるとどかな

芭蕉の句の細みというものも、斯うした細目に精しいところから養われて来て居るかに見える。さすがに芭蕉は囚われて居なかつた。飽くまで日常の生活に立脚して、そこから立派な創作を押し進めて行つた。それも理のあることだと思ふ。何故かなら、芭蕉は細かに日常生活を味はつたばかりでなく、幻想を抱いた詩人であつたから。

〔芭蕉のこと〕「春を待ちつつ」所収 大14・3・8

と記している。芭蕉という人は単に旅を追いつづける人ではなく、じつと

考え、日常に根を下ろし、その日常を見つめてもいる。藤村は、そのような芭蕉をここに見ているのである。「やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲」という芭蕉の句には、「漂泊者の精神の光景」、それは、とりもなおさず、藤村自身の精神の光景が如実に表れているのである。また、二句を並べ、その心を読みとって、「芭蕉は細かに日常を味はつたばかりでなく、幻想を抱いた詩人であつた」とあるが、その生きる姿勢は、まさにこの当時の藤村自身の生き方と重なっている。現実を目をすえ、じつと静座しながらも、藤村の心はけんめいに動いているのである。

ある人から、屏風に帳る言葉が欲しいと依頼された時、藤村は、芭蕉の次のような言葉を書き記している。

紫、白、黄、小豆色など、それだけでも飽きないやうな色であるのに、その小屏風を造りたいといふ人は二尺あまりの高さのものに左右四枚づつ、を貼りつけたいとの話であつた。その時、私の胸に浮かんで来たのは少年時代から好きでよく読んだ芭蕉集中の言葉だ。それを私は八つの小さな紙の上に書きつけて見ることにした。

静かに見れば物みな自得すといへり。  
(蓑虫の跋より)

余が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用ふるところなし。

(紫門の辞より)

古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよと南山大師の筆のあとにも見えたり。  
(紫門の辞より)

愚かなるものは思ふこと多し。  
(閉関の説より)

青鷺の眼を縫ひ、鸚鵡の口を戸ささんことあたはず。

山は静かにして性をやしなひ、水は動いて情をなぐさむ。  
(句合の跋より)

(洒落堂の記より)

朝を思ひ、また夕を思ふべし。  
(行脚の掟より)

(花の句の前書より)

「甘き、辛き、しぶき、淡き心の水の浅きより深きを伝へて、終に一掬して百川の味ひを知れるなるべし」とは、芭蕉が『伊勢紀行』の跋にも見える。この小屏風の短い言葉で、しかも限りのある小さな紙の上に、古人の心の深さを尽くすことは出来ないが、寒い晩には部屋隅にでも置いて戸障子の隙間から来る風をふせぎたまへ、風邪にでも冒された日には枕もとに置いて訪ふ人もない時の友としたまへ、と言つて書いて送つた。

〔「小屏風の言葉」『春を待ちつつ』所収 大13・3・8〕

とある。「少年時代から好きでよく読んだ芭蕉集中の言葉」、「それを私は八つの小さな紙の上に書きつけ」たのである。この八つの芭蕉の言葉は、当時の藤村の心境を的確に伝えていると考えてよい。折りに触れて色紙に記されているのも、このような類の芭蕉の言葉である。

「静かに見れば物みな自得すといへり。」

という言葉の中には、「新生事件」をやり過ぎし、静かに自分自身の内面と向かい合った藤村自身の心境がよく出ている。静かに座りつづけ、嵐のような世間の非難等が通り過ぎるのを待っている藤村自身の生涯と重なっており、以下七つの言葉もそれぞれが意味深いものを含んでいる。そして、



藤村自身の生きる姿勢が、これら藤村が選んだ芭蕉の言葉からよく理解できるのである。

また、「春を待ちつつ」(大14・1・28朝日新聞)の中にある言葉であるが、二十九年前の仙台行きのことを、大正十四年に振り返り、芭蕉の言葉と関連させながら、次のように記している。

長い旅の途中には私は「経験」そのものと言ひたいやうな髪の白い翁にも逢つた。物に滯まず、滞らず、世と共に押移ることを私にささやいて見せるのもその髪の白い翁だつた。ある友達はまだ私の傍へ来て、あまりに人生を重く見るな、あまりに真剣になるものではないと、私にささやいて呉れることもある。「愚かなるものは思ふこと多し」

とか。実に齷齪とした自分なぞは、青年時代に踏み出した時と少しも変わらないやうな、それほど長い夢を今日まで見つづけて居る。そして眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものもなかつたと思ふやうな春の来ることを信ぜずにはゐられないで居る。

とある。「冬の寒さも、何一つ無駄になるものもなかつたと思ふやうな春の来ること」を信じ生きつづける、待ちつづける藤村の姿勢は、単なる表面的な、諦観的な芭蕉理解ではない。藤村イコール芭蕉であり、芭蕉イコール藤村となっている。自分の心境を芭蕉の言葉そのものに託しているし、「動揺に静座した芭蕉」の姿に藤村自身の生き方を見出し出している時期なのである。この時期、象徴的な意味を含んだ「草の言葉」と題する藤村の次のような文章がある。

芭蕉。それほどの野蛮人は私の内にも潜んでゐるかも知れない。その

藤村と芭蕉

力なしに、どうして私なぞがこゝに立つてゐられよう。

蕙。おもしろいことを言つた人もある。その言葉に、この世にめぐら

しく思はれるものが三つある。いや、四つある。空に飛ぶ鷺の路、磐の上にはふ蛇の路、海に走る舟の路、男と女に逢ふ路がそれだ。と。さういふことを言つた人でも、お前が土の中を潜る路ばかりは見落としたと見える。

芭蕉。私が土をつかまうとするのは、あの嬰兒に似ているかも知れない。御覧、あの嬰兒ぐらい弱々しくて、物をつかまうとする力の強いものもない。幹は弱く柔く、葉は破れ易く、そして根は強く――私の本領はそれだ。

芭蕉。さうだ、この雪を通り越すことなしに、私達は新しい春にめぐり逢うことも出来ないのだ。いつか私はこの笠を脱ぎ、蓑を脱ぎ、堅く巻きつけられた縄をも捨て、もう一度広々とした青空を仰ぎ見るやうな日を迎へるだらう。もしその日が来たら、私の新しい巻葉が青い喇叭を見るやうになつて、日に日に延びて、もう一度お前のために楽しい静かな蔭をつくるだらう。

(「草の言葉」昭3・4・1『女性』)

〔「市井にありて」所収 昭5・10・20〕

という文章であるが、ここにある「芭蕉」は植物の芭蕉であり、「蕙」というのは蘭の一種である。この二植物の問答である。芭蕉は野ざらしの植物であり、「幹は弱く柔く、葉は破れ易く」、しかし「根は強い」、それが芭蕉の本領である。この芭蕉と蕙の問答に、特に「芭蕉」の言葉に、この時期の藤村の心境がよく物語られていられると思われ。

「それほどの野蛮人は私の内にも潜んでゐるかも知れない」とあるが、この言葉には、現実にどんなことがあつても、じつと静座しているかに見える藤村自身の生きる姿勢、また、どんなことがあつても生きてゆかなくてはならない藤村の秘めた熱い思いがみてとれる。続いて「その力なしに、どうして私なぞがこゝにたつてゐられよう」とある。たとえ现实生活において、深い苦悩、動揺が内在していたとしても、「野蛮人」の力がある限り、この世を生き抜いてゆけるのである。「どんなにかして生きて行きたい」という藤村自身の腰骨の太さの秘密は、こんなところに潜んでいたものと思われる。藤村は「土の中を潜る」・「根は強く」・「雪を通り越す」等の言葉の中に芭蕉の特質を見ているが、それはとりも直さず、「新生事件」以後の藤村自身の社会に処する姿勢でもあつた。動かす静座し、物事のなりゆきを静観する生き方である。じつと時を待つことにより、「私達は新しい春にめぐり逢うことも出来」と考えているのである。この生き方は、「夜明け前」の松雲和尚の生き方と酷似している。

「草の言葉」の芭蕉と蕙の問答は、このような意味で、「新生事件」以後の藤村の内面を象徴的に語っているといつてよい。心奥に芭蕉を見すえた藤村の生きる姿勢が、このような言葉となつて定着しているのである。松尾芭蕉の号の由来も、この植物の芭蕉にある。

## 四

では、第四期の藤村の芭蕉理解はどうであつたらうか。この時期の藤村は、「新生事件」を乗り越え、加藤静子との結婚も実現し、やつと心の平穏をとりもどした時期である。また、精神的にも安定し、「夜明け前」が

執筆されはじめた時期でもある。執筆中の苦悩はさておくとして、ここでの芭蕉理解は、第三期とは大きく変わってくる。

この時期の藤村の心境を語った言葉に、次のようなものがある。

年若い時分には、私は何事につけても深く深く入つて行くことを心掛け、また、それを歎びとした。だんだんこの世の旅をして、いろいろな人にも交つて見るうちに、浅く浅くと出て行くことの歎びを知つて来た。

（六十歳を迎へて）昭和六年

この言葉は還暦を迎えた藤村の感懐であるが、芭蕉の「重み」「軽み」と重ね合わせ思うとき、大変興味深いものがある。「年若い時分には、私は何事につけても深く深く入つて行くことを心掛け」た、しかし、今は「浅く浅くと出て行く」ことに歎びを知るようになって来たと言っているのである。

「山陰土産」の中にある、旅の動機を述べた箇所が興味を引く。

朝曇りのした空もまだすゞしいうちに大阪の宿を發つたのは、七月の八日であつた。夏帽子一つ、洋傘一本、東京を出る前の日に「出来」で間に合わせて来た編み上げの靴もわらぢをはいた思ひで、身軽な旅となつた。こんなに無造作に山陰行きの旅に上ることの出来たのはうれしい。もつとも、今度は私一人の旅でもない。東京からは次男の鶏二をも伴つて来た。手荷物も少なく、とは願ふものゝ、出来ることなら山陰道の果までも行つて見たいと思ひ立つてゐたので、着更へのワイシャツ、ズボン下、寝衣など無くてかなはぬ物の外に、二三の案内記をも携えてゆくことにした。

とあるように、「身軽な旅」「無造作に山陰行きの旅に上ることの出来たの

はうれしい」ことを強調している。また、三十年あまり前の関西漂泊を思い返しながら、悲愴な覚悟での昔の旅をなつかしんでいるのである。

関西地方を知ることの少ない私に取つては、ひろびろとした淀川の流域を見渡すだけでもめづらしい。私も年若な時分には、伊賀、近江の一部から大和路へかけて、あの辺を旅し廻つたことがあつて、殊に琵琶湖のほとりの大津、膳所、瀬田、石山あたりは当時の青年時代のなつかしい記憶のあるところであり、好きな自然としては今でもあの江州の地方をその一つに思ひ出すくらゐであるが、それから三十年あまりこのかた、私の旅と言へば兎角足の向き易い関東地方に限られてゐた。私は、西は土佐あたりまでしか知らない。山陰山陽方面には全く足を踏み入れたことがない。山陰道とはどんなところか。さう思ふ私は、多くの興味をかけて東京を發つて来たと同時に、一方には旅の不自由を懸念しないうでもなかつた。

〔山陰土産〕昭2・11・20

という箇所がそれであろうか。また、この文章の最後のところに、「山陰山陽方面には全く足を踏み入れたことがない」とあるが、芭蕉自身もそうであり、そこに足を踏み入れるということは、とりもなおさず、芭蕉未踏の地をこれから自分が旅すると思ひでもある。その旅は自己の内面へ向かう深刻なものではなく、「身軽な旅」であり、「多くの興味をかけて、外に向かつて自分を放つ旅でもあったのである。芭蕉の「奥の細道」を藤村流に「山陰土産」と軽くいなしていう点、大変興味深いものがある。この旅は朝日新聞の依頼による旅で、金銭的には心配はなかつたであろうが、この藤村の「山陰土産」の旅については種々考えさせられるところがある。

〔山陰土産〕についての芭蕉との関係については、別の論考を考えている。）

また、

しかし同じ老年とは言つても、人生の旅は一筋道ではなささうだ。去年の初秋、私はある河のほとりに沿うて山道を旅したことがある。私の降りて行く道は、やがて河の流れれて行く道だ。その時、私はさう思つた。昼夜を止めずに低きに就くやうなこの水は、進みつゝあるのだらうか、それとも帰りつゝあるのだらうかと。

兎も角も私達は餅をつき、松の小枝を門にさし、輪かざりを軒にかけて、新しい正月を迎へることが出来た。古人も多く旅に死んだとやら。笠をかぶり草鞋をはいて年を越えると言つた昔の人は、一年に一度のかち栗、ごまめ、数の子の味をよく噛みしめることをこの私達に教へて呉れる。

〔昭和六年のはじめに〕『桃の雫』所収

とあるように、今までの「人生一筋の旅」への思いとは異なり、「人生の旅は一筋道ではなささうだ」とか、「水は高き方より低きに就く」という一方方向のものとは変わり、「昼夜を止めずに低きに就くやうなこの水は進みつゝあるのだらうか、それとも帰りつゝあるのだらうか」と思ひ始めているのである。「古人も多く旅に死せり」と断定するのではなく、「古人も多く旅に死せりとやら」と婉曲になり、その旅によつて、多くのものを伝え日常を豊かにすることができたことに思ひ到つてくるのである。

また、「旅」そのものについても、昔と今とを比較し、

朝を思ひ、又夕を思ふべしとか。昔の人に取つてこそ、旅も修行で

はあつたらう。前途百里の思ひに胸が塞がると言ひ、日々の道中に雨風を厭ふと言ひ、旅は九日路のものなら十日か、つて行けと言ふほどにして、思はず荒く踏み立てる足まで大切にするやうな昔の人の心づかひは、今日旅するもの、知らないことである。思へばわたしたちの踏む道は変わつて来た。多くの人に取つて、旅は最早修行でもない。電車、自動車は一ト息にわたしたちを終点地へと運んで行く。今のわたしたちには、雨具を背にする必要もない。笠を目に傾け、夜の防ぎとなるものを肩に掛けるやうな必要もない。わたしたちはひたすら前進する力の速さをたよりとして、目的とするところへ到着することをのみ考へるやうになつた。

（「交通の変革が持ち来すもの」『桃の雫』所収）と記している。第三期においては、「朝を思ひ、又夕を思ふべし」であつたが、「とか」を附加することにより、「重苦しい」修業的、忍耐の意味を軽くいなしている。また、「交通の変革」によつて、旅そのものの意味も変質してきている。「修行」であつた「旅」は、「最早修行でも」なんでもなくなつてきたのである。「電車、自動車は一ト息にわたしたちを終点地へと運んで行」つてくれるのである。苦行・修業的道を踏まなくても乗り「い」るだけで目的地へ到着する。到着したところから次の一歩をそれはそれで意味がある。このように思い到るようになったに芭蕉の生きた年齢を越え、芭蕉の行き尽くしたところから「とする姿勢に大きく変わつて行こう」として思っているように思わ「る」芭蕉から、内心では芭蕉を強く意識しながらも「浅く浅く」る芭蕉理解へと変化している。それがよくわかるのが次

の「芭蕉」という文章である。

よく見れば芭蕉には、この時代にすでに次のやうな句もある。

雪の朝独り千鮭を噛み得たり

芭蕉野分して盃に雨を聞夜哉

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

更にまた次のやうな句もある。

はせを植てまづにくむ萩の二葉哉

あさがほに我は食くふをとこ哉

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

こんな風に芭蕉はまことの詩人らしい眼を開いて行つた。新しく興つた元祿の俳諧と、すでに先蹤のあつた天明の俳諧との相違も、そこにあると思ふ。わたしは芭蕉の青年期を振り返つて見て、この人にもこんな彷徨の時代があつたかと考へる。それほど周囲は暗かつたのだ。談林風の軽い滑稽はあつても、生気の充実した好いユウモアに達し得たものはなかつたのだ。さういふ中で、芭蕉がいろいろなるものを振り捨てて『猿蓑』の深さにまで詩の境地を進めて行つたあの不断の努力と精進とを想ひ見ると、あれほど動揺の多かつたその青年時代もまたなつかしい。おそらく年若い頃の芭蕉が才氣にまかせて歩いた路はわたしたちの想像以上ではなかつたらうか。何程の精神の革新がそこに持ち来されたことだらう。そう想つて見ると、あの「一つぬいでうしろに負ひぬ」と更衣の吟も、たゞの旅路の口ずさみとは思はれない。

（「芭蕉」『桃の雫』所収昭11・6・5）

とある。ここに見られる芭蕉の扱え方は、まさに藤村自身の人生への処し

方でもある。中でも「一つぬいでうしろに負ひぬ衣更」という芭蕉の句に對する藤村の感懐、「たゞの旅路の口ずさみとは思はれない」という言葉の裏に籠めた思いこそ、時々芭蕉と関わり、次の芭蕉へ、次の芭蕉へと行き尽した藤村流の芭蕉理解を象徴するようにも思われる。

また、「生気の充実した好いユウモアに達し得た」という藤村の芭蕉理解も、藤村自身の晩年の生きる姿勢と重って、大変興味深く私には思われる。

『夜明け前』完成後、藤村は他より押されて国際ペンクラブの日本支部の会長となるわけであるが、アルゼンチンへの大会に参加する際、芭蕉終焉の地を訪れている。そのことが『巡礼』という紀行文に記されている。

#### 船出

漸く大阪まで動いたのは昭和十一年七月十四日、神戸の波止場から南米行きの大坂商船リオ・デ・ジャネイロ丸に移つたの十六日の午後であつた。ブラジル及びパラガイ行の移民八百五十余名とも同船した。何といふあわたゞしきでこの旅の上つたことか。過ぐる十八年も住み慣れた東京麻布飯倉の旧い家を畳み、家具一切は川越の親族の家に預けるから、漸く大阪まで動くだけでも、まるで引越しと大晦日と旅立ちの支度とが一緒にやつて来たやうな騒ぎをした。あの大坂北浜の宿まで追ひかけて来て何くれとなく心配して呉れる誰彼の助けがあればこそ、こゝまで出られたと思ふ。そのあわたゞしさの中で、朝早く宿の番頭を案内に頼み、かねて『花屋日記』などで想像してゐた芭蕉終焉の地なる久太郎町を訪ねて来た時のことも忘れがたい。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の一句が右に彫り刻まれて僅かに街路樹

のかげに立つばかり。句碑の周圍に植ゑてある「もつこく」の木も誰の手向けかと眼についたが、市街も変り改まつて、ほとほと往時を追懐するよすがもなかつた。しかし自分としては忘れがたい古人終焉の地を踏むといふだけでも満足し、附近の花屋から求めて行つた草百合なでしこ、桔梗などをいさゝかのしるしばかりにその句碑の前に置いて立ち去つた。おそらく青年時代から自分を導いて呉れた古人は、今また遠く行く自分を導いて呉れるであらうなぞと思ひながら、この旅に上つたわたしだ。

(『巡礼』昭和15・2・15)

という箇所である。芭蕉の死を越えて、自分なりの旅に上らんとする藤村の姿がよく見てとれるのではなからうか。最後のところに、「青年時代から自分を導いて呉れた古人は、今また遠く行く自分を導いて呉れるのであらう」などと思ひながら、日本を旅立つたのである。藤村にとつて感無量の思いがあつたろうとは確かであり、芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」という「重み」「軽み」を越えた、生きていくといふことの歎びを強く感じたに違いない。芭蕉を求めて芭蕉に行き着いた藤村の姿をそこに見ることができるといっても過言ではないと私は思う。

最後に、藤村の芭蕉理解を象徴すると思われる芭蕉の句を、それぞれの時期から一、二句を挙げて、結びとしたい。

#### 第一期 猿を聞く人捨子に秋の風いかに

くたぶれて宿かる頃や藤の花

第二期 草の戸も住替る代ぞ雛の家

古人も多く旅に死せるあり

第三期 やがて死ぬ景色は見えぬ蟬の声

海士の家は小海老にまじるとどかな

第四期 一つぬいでうしろに負ひぬ更衣

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

それぞれの時期に藤村が関心をもった句である。また言葉である。藤村の生涯を考えたとき、「仙台東北学院への赴任」・「新生事件」・「加藤静子との結婚」という藤村にとって転期とも言える大きな出来事・事件が起こっているが、これらの芭蕉句は、その間の藤村の内心を理解する上でも大変重要であり、藤村の内心の象徴と考えても過言ではないと私は思っている。

〈注1〉芭蕉に関する藤村の文章

- 1 故人 明25・8・22 女学生
- (2) 石山寺へ「ムレット」を納むるの辭 明26・2・28 文学界)
- 3 馬上、人世を懐ふ 〃 〃
- 4 かたつむり 明26・3・30 文学界
- 5 訪西行庵記 明26・仲春 星野天知 『黙歩七十年』初出
- 6 人生の風流を懐ふ 明26・4・29 文学界

- 7 刀鍛冶 堀井來助 明26・6・30 文学界
- 8 茶丈記 明26・7・30 文学界
- 9 魂祭 明27・3・30 文学界
- (10) 村居謾筆 明28・3・30 文学界)
- (11) 西花余香 明29・5・26 うら若草)
- (12) 吾が生涯の冬 明40・3・20 中学世界)
- 13 『春』 明41・10・18 東京朝日新聞
- 14 芭蕉の一生 大元・12・1 文章世界 『後の新片町より』収録
- 15 『櫻の實の熟する時』 大8・1・1 大2461 文章世界
- 16 芭蕉 大8・1・1 新小説
- 17 藝術と實行 大9・9・1 朝日講演集第五輯
- 18 木曾路 大9・7・1 『新家庭』臨時増刊『山水巡礼』
- 19 『エトランゼエ』 大11・9・18 大1044 『佛蘭西紀行』新小説
- 20 文学に志した頃 大11・9・5 『飯倉だより』所収
- 21 芭蕉と一茶
- 22 芭蕉のこと
- 23 流行と不易
- 24 浅瀬を奔り流るる水のごとく
- 25 小屏風の言葉 大14・3・8 『春を待ちつつ』所収
- 26 言葉 大1411 アルス新聞
- 27 消極と積極
- 28 春を待ちつつ 大14128 朝日新聞
- 29 一茶の生涯 大15・7・1 早稲田文学
- 30 言葉の術
- 31 草の言葉 昭5・4・1 女性
- 32 近江の自然 昭5・10・20 『市井にありて』所収
- 33 折にふれて

34 生一本  
35 昭和六年のはじめに  
36 回顧  
37 第三の眼  
38 交通の変革が持ち来すもの  
39 芭蕉  
40 『夜明け前』  
41 『巡礼』

その他「家」「眼鏡」「新生」「山陰土産」「平和の巴里」「戦争と巴里」「海へ……」若葉集」「落梅集」をはじめとした詩集などに直接・間接に芭蕉の影響が強くみられる。

〔注2〕藤村蔵書目録中の俳諧に関する研究書

|    |                    |        |           |       |
|----|--------------------|--------|-----------|-------|
| 1  | 年代鑑別 芭蕉俳句定本        | 勝峰晋風   | 大12・10・30 | 古今書院  |
| 2  | 一茶旅日記              | 勝峰晋風解説 | 大13・6・18  | 古今書院  |
| 3  | 芭蕉七部集定本            | 勝峰晋風   | 大14・2・20  | 岩波書店  |
| 4  | 芭蕉一葉集              | 勝峰晋風   | 大14・9・10  | 紅玉堂書店 |
| 5  | 芭蕉翁略伝と芭蕉連句評釈 幻窓湖中著 | 勝峰晋風   | 大14・12・5  | 紅玉堂書店 |
| 6  | 一茶叢書(第四編 七番日記上)    |        | 昭2・6・8    | 古今書院  |
| 7  | " (〃下)             |        | 昭2・7・18   | "     |
| 8  | " (第七編 我春集)        |        | 昭3・5・14   | "     |
| 9  | " (第九編 小篇三十種上)     |        | 昭5・1・8    | "     |
| 10 | " (〃下)             |        | 昭5・1・24   | "     |
| 11 | 一茶の種々相             | 川島つゆ   | 昭3・7・10   | 春秋社   |
| 12 | 芭蕉連句の根本解説          | 太田水穂   | 昭5・11・20  | 岩波書店  |
| 13 | 芭蕉に参する心 二瓶一次       |        | 昭6・3・10   | 厚生閣書店 |
| 14 | 芭蕉一代記(全四冊)         | 勝峰晋風   | 昭6・4・15   | 春秋社   |
| 15 | 俳句講座(鑑賞評釈篇)        |        | 昭7・7・10   | 改造社   |

藤村と芭蕉

|    |               |       |           |        |
|----|---------------|-------|-----------|--------|
| 16 | " (第九卷 俳人評伝)  |       | 昭8・2・20   | "      |
| 17 | " (第十卷 地方俳史伝) |       | 昭8・3・24   | "      |
| 18 | 俳句鑑賞論         | 浦野芳雄  | 昭8・12・25  | 大同館書店  |
| 19 | 芭蕉論           | "     | 昭9・8・12   | "      |
| 20 | 芭蕉七部集(上)      | 長坂金雄編 | 昭12・8・1   | 雄山閣    |
| 21 | 西行百首          | 山崎斌編  | 昭13・10・10 | 草木屋出版部 |
| 22 | 芭蕉百句          | "     | 昭16・4・15  | "      |
| 23 | 良寛百首          | "     | 昭13・5・15  | "      |
| 24 | 一茶百句          | "     | ?         | "      |
| 25 | 芭蕉七部集鑑賞       | 川島つゆ  | 昭15・11・25 | 春秋社    |
| 26 | 凡兆句集          | 高木蒼梧  | 昭16・9     | 草木屋出版部 |
| 27 | 凡兆句集          | 山崎斌編  | 昭17・1・20  | 月明会出版  |
| 28 | 俳句入門          | 安成山耳  | 昭17・5・5   | 月明会出版  |

〔キーワード〕藤村／芭蕉／藤村の旅／藤村の芭蕉受容／藤村の芭蕉理解の変遷

(コミュニケーション学科)  
(一九九七・一一・五 受理)